慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	林要訳 分配論
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.11 (1924. 11) ,p.1676(138)- 1681(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241101-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

林要譯『分配論』

本文五七八頁
定價三圓五十錢
岩波書店發行

限界效用學說の創述者たるの榮譽を擔ふべき者が何人なりやは、敢て茲に問ふべき問題ではないが、初めて之を組織的に陳述せし者はDupuit（1884）とGossen（1854）とであらう。併しながら之を今日有するが如き形に於いて世に現はせる業蹟は英國のJevons（1871-1873）瑞西のWalras（1874）及び墺國のKarl Menger（1871）に認むべきである。詢に限界效用學說は其國を異にせる是等諸家が互ひに相知ることなくして殆んど同時に同一結論に到達せる所謂『同時的發見』である。然るに此學說は其後、その主要なる代表者を墺太利の地に續々發見することゝなつた。曰くBöhm-Bawerk曰くWieser曰くSax等々。故に限界效用學說は所謂墺太利學派の獨占なるかの如き觀を呈するに至つた。

併し固より限界效用論者は單に墺太利にのみ見出さるゝものではない。殆んど時を同じうして諸國より之が代表的學者を輩出してゐる。例へば墺太利學派の延長とも云ふべき亞米利加學派の如き即ち是である。而もこの亞米利加學派は、墺太利學派が限界效用說を主として價値論の範圍に適用するに止めてゐるに反して、この效用漸減の法則より演繹せる普遍的原則を廣く分配論の範圍に迄推し及ぼしてゐる點に於いて其特色を有するのである。吾人が茲に紹介せんとするは、實にこの亞米利加學派の創始者にして又限界效用學說の爲に著しく貢獻を爲せしコロンビヤ大學教授John Bates Clark氏その人の著書である。

こゝに譯出せられしものは、彼の十指に餘る著作中の主著とも稱すべきものにして、題して"The Distribution of Wealth. A Theory of Wages, Interest and Profits."と云ふ。結構を分つて二十六章とし、その一々の題目は直接原著に就いて知られんことを望む次第であるが、其要を摘記するば先づ分配に關れる論爭、經濟學の傳統的並に自然的諸部門内に於ける分配の地位を明かなら〻め、轉じて賃銀、資本の本質を展開し、而して賃銀及び利子は最終生產性によりて整規せらるゝ所以等を論述して居る。

本書の目的は、著者自らの言に從へば「社會所得の分配は自然法則に依つて支配せらるゝこと、及びこの法則は、若し何等の摩擦なく作用するならば、それ々々の生產要因に對して、その要因の創造するだけの富を與へることを、示さんとするに在る」のである。「如何に賃銀が、個人間に自由に締結せらるゝ契約によつて按配されようとも、斯る取引より生ずる支拂の率は——本書の主張する所に從へば——產業の生產物中、其本源を勞働そのものに求め得べき部分と等しくなる傾向を有する。而して利子も亦同樣の自由契約によつて如何に按配されやうとも、其は單獨に資本に迄遡源し得る分數的生產物と自ら等しくなる傾向を有するのである。經濟組織上財產に對する權利が發生する其點に於いては、社會的手續は財產權の依て以て基礎となす原則に忠實である。即ち社會的手續は、そが妨害を受けざる限り、それ々々の人に對して其人が專ら生產せしものを割き與へるのである」と。（op. cit. P. V, 林氏譯十三頁）彼を以てHedonistと目する者あるも又故なしとしない。

吾人思ふに、クラークの思想體系中特異と看做すべきものは、前にも一言せし限界效用說を分配論に適用せしこと、經濟現象を靜態と動態に分つて論述せしこと、並に其資本に關する見解等の諸點に存するであらう。殊に其資本學說は、クラーク自らも言へるが如く、本書の體系を他のそれと區別する一特色である。本書に展

開せらるゝ理論には、墺太利學派のそれと相類似せる幾多の點が存すると同時に、相對立せらるゝ諸點も尠からず、就中著しきものは實にこの資本學說である。この點に關して本書の著者と墺太利の碩學故ボエーム・バウエルクとが大洋を距てゝ稀に見る大論戰を闘はし、學界に一大旋風を惹起せしことは、世人の普く知る所である。我國に於いても之に關して論及せし著書論文は決して乏しくない。筆者も亦二三の紹介を試みしことがある。今又資本に關する彼の見解の梗概を摘記して以て紹介を了へることゝしよう。

資本の定義に就いては古來學說區々として定らぬが、當今資本とは過去の生產の結果にして將來の生產に役立つ資料一切を總稱するものであるとの定義が通說であるかの如く思はれる。是は所謂國民經濟的資本又は生產資本の意義であるが、更にその形式は、(1)原料及び補助材料(2)生產經營の資料、(3)生產用の建設物、(4)交通機關の設備、(5)生產的地上設備等に分類せらるゝが常である。然るにクラークの見解に從へば此等のものは所謂資本財なるものである。即ち具體的形態を有するものは資本ではない。資本とは、此等具體物の表はす價値の總稱である。彼自らの言を以てすれば、「現に貨幣に表はし得れども貨幣そのものに具體化されざる生產的富の永續的元本」である。即ち資本財は具體的概念であるけれども、資本は抽象的概念であるのである。讀者諸君試みに實業家に尋ねられよ、「貴下の資本は」と。彼は答へるであらう、「私の資本は十萬圓です」。併し茲に注意しなければならぬことは、彼は十萬圓と云ふ貨幣を金庫内に所有してゐる譯ではないと云ふことである。若し斯る貨幣を囊中に藏する者ありとせば、彼は無爲無能の實業家である。通常は彼の十萬圓は工場機械、原料其他種々の物から成立してゐる。而も「貴下の資本は」とは尋問せらるれば、彼は此等の具體物を一々列擧せず、或一種の抽象的概念を以て答へる。而して彼が事業を繼續するに從つて、原料は消費せられ、生產物は賣却せらる。換言すれば此等の具體物は日々變化しつゝある。然るに彼の十萬圓の資本は依然として十萬圓である。例へば瀑布に於いて、その瀑布を構成する水の各部分は時々刻々變動して止まらぬが、その變動する水より成る瀑布そのものは依然として其在る所に在り。資本とは斯の如きもの、即ち生產的富の永續的元本であると云ふのである。斯く解すれば一部論者が資本と土地の區別の論證に傾注せる苦心の如きは無用の事となる。蓋し土地は彼の所謂資本を構成する資本財の一種と觀るを得るからである。

而して以上の說明によつて知らるゝが如く資本に固有なる屬性の一は永續性である、之に反して資本財のそれは可滅性である。（土地のみは之が例外たり）而も資本が永續する爲には資本財は消滅しなければならぬのである。例へば小麥が永續する爲には一つ々々の小麥種子は死滅しなければならぬが如くである。

次に資本は全く可動的であるが、資本財は然らず。百萬弗を一產業から取出して他の產業に移すことは可能であるが、併し一產業に使用せらるゝ道具を具體のまゝ取出して他の產業に移すことは不可能である。ニュウ・イングランドの捕鯨に投下され居る資本は、或程度まで之を紡績業に移轉することが出來るけれども、其船を直ちに紡績工場として用ふることは到底實現されざる相談である。

而して資本財には二種類ある、一は能動的であり他は受動的である。物體を變形する機械、それを移動させる運搬具、及びそれを保護する建物等は總てこの範疇に屬する。而して人類と自然との間の戰ひに於いて人類側を援助する所有る用具も亦、具體的資本財の能動的種類を構成するものである。是れに反して、器具の加工する材料は受動的である。此等は人と自然との鬪爭に於いて自然側に與みして人並に人の能動

的用具に對して受身の態度を持する。紡錘は能動的であるが、綿は受動的であり、鐵槌は能動的であるが、鐵鑛は受動的である。かくて產業分野を通じて過程そのものゝ性質が、能動的に作用しつゝある器具と受動的材料との間に一境界線を劃するのである。但し受動的資本財は斯の如き原料のみならず、未完成品も又商人の手に在りて購買者を待ちつゝある所有る商品のストックをも包含するものである。而して資本財のこの區別は、所謂固定資本と流動資本との間に通例なさるゝ區別の基礎となるものである。

然らば利子とは何ぞや。其は富の永續的元本の年々儲くるそれ自體の一分數である。其は百圓によつて年々儲けられる五圓である。世界の建物、機械及船舶に體現せらるゝ資本は、斯の如くして增大するのである。通例利子は步合を以て示さる、而して步合は資本それ自體とそれの年々の收益とが共に價値單位を以て記述せらるゝことを意味する。即ち利子は資本の儲くるものである。然らば資本の儲くるものは如何。そは賃料（レント）と名付くる所のものである。

以上は單にクラーク教授の資本學說の一面の梗概に過ぎぬ。併し要約するに彼の資本學說の中心點は資本と資本財との峻別に存する。日常業務の慣例を移して以て、抽象的觀念としての資本を理論的に打ち立てし點に彼の思想の特色は燦然として輝いて居るのである。彼に關するあらゆる論難攻擊は皆之を中心として旋回して居るのである。

今やこの限界效用論者中の一驍將の主著我學界に飜譯せらる、敢て何等の意義なしとせず。譯文は、未だ以て全然推敲の餘地なしとはせざれども、極めて流麗平明なる筆致を以てしてゐる。譯者の多大の努力に敬意を表すると同時に純理學經濟學に興味を有する大方諸彥に一讀を推奬する次第である。（金原賢之助）

前號（第十八卷第十號）目次（大正十三年十月號）

論說

◉農業の進化　瀧本誠一
◉較差地代と絕對地代（下）　小泉信三
◉組織的觀念市場としての取引所　向井鹿松

雜錄

◉ソレルと唯物史觀　百瀨二郎
◉生產的及び不生產的なる語に就て（四）　榎本鑛治
◉佛蘭西經濟學に於ける價値論の發達（四）　津田誠一
◉エドワード三世に關する一考察（上）　高木壽一

新刊紹介

◉露西亞に於ける協同組合運動　伊藤秀一

◉一冊定價金五拾錢
◉半ヶ年分金貳圓九拾錢
◉一ヶ年分金五圓四拾錢
郵稅金壹錢五厘　郵稅共

◉編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
◉營業に關する用件は發賣元宛
◉原稿締切期日は發行の前月十日限

大正十三年十月卅一日印刷納本
大正十三年十一月一日發行
每月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第十八卷第十一號
編輯兼發行者　東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內　江田範保
印刷者　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子鐵五郎
印刷所　東京市赤坂區新町五丁目四十二番地　金子活版所

發賣元　東京市芝區三田貳丁目壹番地　丸善株式會社三田出張所　電話高輪一九二六
◉尙ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會